
一刀の浪漫漂流記

jack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一刀の浪漫漂流記

【Nコード】

N2003Z

【作者名】

jack

【あらすじ】

一刀が激動の戦国乱世を駆け抜ける！

彼を待つ運命とは・・・

恋姫の戦国版と考えていただけると分かりやすいです

戦術等の設定や背景として「Wiki」や漫画「センゴク」等の知識を使用しています

基本的にご都合主義のハーレム主義ですので、苦手な方にはお勧めできません

史実と違う場面が多々ありますのでご注意ください

自分のサイトでも投稿していますので、プロフィールから飛べますので小説を気にしていただければ足を運んでいただけると嬉しいです

一話（前書き）

jackと申します

至らない所ばかりですが温かく見守っていただけると幸いです

誤字・脱字がございましたら報告していただけるとありがたいです

一話

永禄3年5月19日・熱田神宮

「信長様、こんな場所に一体何の用があるのです？」

「何となく私を呼んでるような気がするわ」

「でも、こんな所で…」

戦勝祈願を終えた信長は一人の少女を連れ熱田神宮の裏に来ていた。
キラーン

ドカン

「な、何今の？」

「行くわよ」

「イテテ、ここ何処だ？」

一体何だつてだ。

辺りを見渡し全く知らない土地に来た事だけは確認できた。

確か俺は遅刻しそうだったから急いでベットから飛び起きようとしたら、いきなり目の前が光って……

今に至るわけか。

ズドドド

な、何の音だ？

「お兄ちゃん大丈夫か？」

「えっ、あ…はい…」

目の前に現れた馬に乗った少女が、俺の安否を気遣ってくれた。

背は低く、茶色い短髪に少し野生的な雰囲気漂わす女の子。

「何があったの？」

もう一人、馬に乗った少女が現れて言った。

そのオーラはまさに霸王。背は普通で金髪のセミロングを後ろでくくっている。

整った綺麗な顔だがやや幼さが残る。

この時まさに天を求めし者と天からの遣いが相見えた瞬間であった。

「人が倒れていました。でも大丈夫そうです」

「そう。なら良かったわ。ところであなた何処の者？変わった服装をしているけれど」

「東京から来たんだけど…」

「とうきょう？そんな名前の土地聞いた事が無いけど」

「東の方にあるんだけど…」

「東と言えば江戸のあたりか？」

「えっ…今何て」

「だから、江戸のあたりかと聞いたのよ」

「つかぬことを聞きますが、ここは何処ですか？」

「ここは熱田よ」

頭が混乱してきた…

「なあ、名前何ていうの？」

突然背の低い少女が聞いてきた。

「俺の名前は北郷一刀」

「変わった名前ね。私は織田信長よ」

「僕は前田利家」

今何て…まさか…いやでも漫画じゃあるまいし…。

そもそも俺の知ってる二人は男のはず…。

「どうします？信長様。素性が分からないので…」

「とりあえず連れて帰るわ。この男が私の野望に大事な気がするから」

（城内）

俺は玉座の隣に座らされていた。

「忙しいのに集まってもらって悪いわね」

玉座には恐らく將軍クラスの人達が集まっていた。ただほとんど全員女の子だけだ。

「急で悪いけどこの子を保護することにしたわ」

「信長様、この大事な時にそのような訳の分からぬ者を何故」

「勝家、この子は天から降ってきた。つまり天の遣いかもしれないわ。それに私の勘よ」

勝家と呼ばれた女性は歳はとっているであろうがそんな雰囲気を感じさせず、素敵な大人の魅力がある。

しかも、巨乳の黒髪美女だ。

「しかし、今川軍の者の可能性もあります。行動は慎重にしていた
だきたいのですが」

「桶狭間の前か…」

そう呟いた瞬間、空気が凍り付いた。

「貴様、その情報何処で手に入れた。桶狭間でやり合つという作戦
はここにいる者のみが知り得る情報のはず」

勝家と呼ばれていた女性が首に刀が押しあて殺気のコもった声で言
う。

「どこで知るといわれても…」

「言わぬという事はそれなりの覚悟ができておるのじゃろうな？」

身の危険を感じ、信じてもらえないとわかりながらも意を決し言う。

「俺は未来から来た…」と思う」

「呆れた戯言を…余程死にたいようじゃのう」

「待ちなさい勝家。詳しく話なさい」

俺は信長に思っている事を話し始めた。

一話（後書き）

お読みいただきありがとうございます
のんびり更新していきますので大目にみてやってください

一話

「……という事だと思う。自分でも信じられないけど」

俺は未来から来た事、俺の世界では武将は男だった事など分かる範囲で答えた。

誰も声がでない。

「分かったわ。あなたを私の将として迎え入れましょう」

「しかしこの様な、どこの馬の骨とも判らぬ奴にいきなり将という大役は皆が納得しかねます！」

勝家と呼ばれていた女性が語気を強めて言う。

「勝家、戦で重要な事は何？」

「武術と知力と冷静さです」

「当然それも重要よ、でもね情報無しでは戦は勝てないわ。しばらくは勝家が面倒を見なさい。軍議の後、一刀の武と知の報告をなさいそして竹千代を下につけるわ。竹千代、一刀の補佐を頼むわね」

「御意」

「（あれ、徳川家康はまだこの頃は今川の質だったはず）」

そう、正史ではまだこの頃は今川軍の人質となっている。

しかし、この世界では信長の母信秀は虎の子の竹千代を守りきっていた。

「もし一刀が努力をしないようなら私に報告なさい。私が自ら首を斬るわ。以上、解散」

玉座を出ようとしたタイミングで声をかけられる。

「私が松平元康だ。これからあなたの補佐をしていく。肩書きはあなたが大だがビシバシ言うので覚悟しろよ」

俺と同じくらいの歳の女の子が、豪快に言う。

髪は茶髪のショートヘアで威風堂々した風貌である。

「よろしく」

「こつちが私の部下の本多忠勝だ」

「……ご主人様のご主人様、よろしく」

家康とは対照的に無口な、こついつては何だが能天気そうなほんわかしてるオレンジの髪を背中まで伸ばした女の子が呟いた。

戦国最強だよな…

「よろしく」

「忠勝、その呼び方はややこしい」

「……じゃあ、一刀」

つぶやく忠勝。

挨拶を済ませ俺は自分の部屋に向かおうとした…が捕まった。

「北郷、さつきはすまなんだのう。お主を嫌ってるわけではないのだが如何せん信じられんのでのう」

「気にしてないですよ。自分だって信じられないですから。それに逆の立場なら勝家さんと同じようにしてると思えますから」

「……ふむ、そうか。なら武と知を測るついて来い」

俺の腕を掴んで有無を言わず引っ張って行く勝家さん。

「さて、構えてみせい」

勝家さんの言葉で刃を潰した得物を持ち構える。

「ほう……」

「行きます!」

「来い!」

高速で間合いに入り右・左の横薙ぎを打つがいなされる。

反撃を避ける為間合いを取り、そのあとは突きを何回か繰り出すも防がれ逆にこちらも突かれるがそれを上手くかわす。

暫く一進一退の攻防を繰り広げるが最後は勝家さんの刀が首の前で止まっていた。

「強いのう。しかし、殺気がまるでない」

「俺のいた時代では日本が平和でしたから」

「そうか……お前死ぬぞ」

冷たい言葉に寒気が走る。

「この乱世では生きるためには非道にならねばならぬ時もある。覚悟を決めねば死ぬ。忘れるでないぞ。では、次に知を測るかの」

そういうと勝家さんの禅問答と戦術に関する問いに答える。

「ふむ、お主かなりの将になれるであろうぞ」

「生きる為に励みます」

「よき眼じゃ。悩み、苦しみ、恐れても生きることが諦めてはならぬ。よう覚えておくのじゃ。さて、ついてこい」

そう言つと俺の腕を引っ張って行く。

「遅いよ」

そこには待ちくたびれた利家がいた。

「すまんの」

「ど、どうも」

「おお、御遣いのお兄ちゃんも一緒か。早く飲もつよ」

「そうじゃの」

こうして三人仲良く酒を飲んでいた。

二話（後書き）

リアルがやっと一段落したのでちまちまと更新していきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2003z/>

一刀の浪漫漂流記

2011年12月25日00時47分発行